

ショートショートもどき：魔法の指輪

夏井高人

年頃のアリスはいつも悩み、そして親を恨んでいた。「どうして自分を美しく生んでくれなかったのだろう？」、「どうして金持ちの家に生まれなかったのだろう？」と。

貧しい家の娘でも綺麗に生まれついた子供は金持ちの息子に見初められ、言い寄られ、頭が悪くなければ玉の輿に乗ることができるかもしれない。実際、アリスと同じ年齢のルチアはそうだった。とても貧乏だったのに、青く輝く目、雪のように白い肌、天使のように美しい金色の髪をつけて生まれてきたおかげで、今では一家全員が豊かな暮らしをしている。

この街で一番の大金持ちシュタイン家のユリアはお世辞にも美人とは言えない。性格が悪ければ素行もよくない。お菓子の食べすぎのためにかなり太っている。街の中でユリアの陰口を言わない者は誰もいない。それでも、大資産家の一人娘だというだけで立派な紳士が次々と求婚にやってくる。はるばる遠くの街からもやってくる。

それにひきかえアリスはどうだ。ぼろぼろの服を身にまとい、近くの農家の手伝いをして申し訳程度のコインをもらい、そのコインで黴の生えたパンを買い、一家がどうかこうにか飢えをしのいでいるような状態だ。

そんなものだから、アリスはいつも「神様は不公平だ」と不満をもっていた。

そんなある日の夕方、アリスが力仕事に疲れ、帰宅途中の小さな橋のたもとに腰をおろし、冷え切った手をすり合わせながら自分の息を吹きかけていると、立派な馬車が通りかかった。

黒光りのする2頭だての馬車で、金の装飾が輝いている。アリスが、「こんな素晴らしい馬車はシュタイン家の人間でももっていない。一体誰が乗っているのだろう？」と思っていると、その馬車がアリスのところをちょっとだけ通りすぎた場所で止まった。そして、窓の黒カーテンがちょっとだけ開き、その中から女性の声がした。

「幸せになりたいと思っているのかい？」

アリスは、きょとんとして立ち上がり、それから答えた。

「もちろん！」

すると窓の中の女性の姿がほんの少しだけ見えた。黒いビロードの大きな帽子をかぶり、顔の前には黒いベールのようなものをたらしめている。そして、こう言った。

「幸せを悔やむことになるかもしれないよ」

しかし、アリスにとっては「幸福は幸福」だとしか考えられなかった。なにしろ、これまでの人生で不幸でなかったことはない。そう思っていた。そこで、きっぱりとこう言った。

「そんなことないです！」

すると、馬車の中の女性は、かすかに微笑んだように見えた。そして、「じゃあ、これをあげる。大事に使いなさい。」と言うと、その窓から何かをアリスに投げてよこした。

アリスは、それを受け止めそこない、川のほうに転げ落ちていくのを追いかけて、草むらを掻き分けてやっとのことで探し出し、そして拾うことができた。

ピカピカに輝く金の台にはめたとっても大きな宝石だった。アリスはその宝石の名前を知らなかったのだが、たぶんユリアが誕生日プレゼントにもらった宝石の話を思い出して、「きっとこれがルビーというものね」と思った。綺麗な宝石を見ながら、アリスは、「街に行ってこれを売れば、1年くらいは働かなくても食べていけるかもしれない」と思った。そして、「誰か知らないけど、金持ちが貧乏人に恵んでくれたのね。もらっちゃおう。」と決めると、ゆっくりとその指輪を自分の指にはめ、それから土手を登って馬車のところに戻った。

そこに止まったままの馬車の戸は開いていた。しかし、その中には誰もいない。そこで、アリスが御者に話しかけると、御者は、しばらく黙っていた後、おもむろに「ご主人さま、どのような命令でもどうぞ。」とアリスに語りかけてきた。

アリスは何のことか理解できず、周囲を見渡した。そこには自分しかいない。

「私のこと？」

「そのとおりです。ご主人さま。」

みすばらしい格好をした自分が「ご主人さま」であるはずがない。何となく嫌な気分でアリスが自分の手を見ると、生まれてから今日まで力仕事など一度もしたことがないような柔らかくすべすべした手になっていた。まるでお姫様のような手。その指にはさっき拾った指輪がしっかりとめられ、赤く輝いている。しかも、自分の服装は、どの国のどの皇女よりも素晴らしいものではないかと思われるような豪華なものになっていることに気づいた。

そして、思った。

「これはきっとおばあさんが話してくれた魔法の指輪に違いない。私にもやっと幸福がめぐってきたのかな。こんな素敵な指輪をただでもらえるなんて。あの女の人は大馬鹿ね。頭がおかしくなっちゃったのかな。それにしても、一体どこに消えてしまったのだろうか？」

アリスが馬車の周囲を見渡しても、あの女性の姿を見つけることはできなかった。そして、こう思った。

「まあ、あの女の人のことなんてどうでもいいわ。今日から私が女王様になるのよ。」

アリスは、勇んで馬車に飛び乗った。

アリスの頭の中には、自分の家族のことなど少しも残っていなかった。アリスが稼ぐわずかのお金をもって街のパン屋に行き、パン屑を買って帰宅しないと家族がみんな飢えてしまうということもすっかり忘れてしまった。

それから、アリスは、馬車の前に腰掛けている御者にこう命じた。

「王宮へ行きなさい！」

アリスは、座先の中に埋もれ、「今日から自分が女王となり、これまでずっと憎いと思っていたユリアやルチアを家族もろとも処刑して復讐してやる。復讐を果たしたら、自分の好きなだけ贅沢をして生きるのよ」と考えると、笑いが止まらなかった。馬鹿笑いに近い。

御者が馬に鞭をふるい、土煙をあげて馬車が走り去った。

そのあと、その道の傍らに古びてうす汚れた灰色のマントをはおった老婆がひとり倒れていた。

「好きなだけ味わいなさい。」

かすかな声を出すと、その老婆は息絶えた。